

ト&マラソン) から、「外国産のカブトムシやクワガタの育成に廃菌床を分けてくれないか」と声を掛けられたことだ。同社を訪れ、大きな外国産カブトムシを間近に見て、畠山社長は「廃菌床を価値ある物に変えていく起爆剤を見つけた」と感じたという。ピルツは20年、T O M U S H I に廃菌床を使った昆虫マットを開発・提供する代わりに、昆虫飼育のノウハウを教えてもらうことで業務提携した。

ピルツの取り組みは各地に知られるようになり、去年は地元のテーマパークで昆虫を題材とした子供向けのイベントを開催した。今年も、地元のほか仙台市や群馬県でイベントを予定している。今後は「県産」にこだわり、県内で採集したカブトムシの育成にも注力する。現在は外国産カブトムシと別の飼育室で2000～3000匹を育成しており、将来的には県産カブトムシの育成数も増やしていく予定だ。畠山社長は「体が小さくても数が集まれば廃菌床を消費してくれる。県産カブトムシで分解できれば、さらに循環型農業に近づく」と強調する。

◇ふんの活用へ農家と実証実験

ピルツは、昆虫を育てる過程で出るふんの活用も見据えている。

幼虫のふんはペレット状で扱いやすく、臭いも少ない。同社が運営しているツイッターでの情報交換で「ふんを家庭菜園にあげたら野菜が大きくなった」との話が寄せられ、近隣農家と協力して、幼虫の餌交換で排出されたふんを含むマットをハウレンソウ畑にまく実証実験を昨年夏に開始した。農家からは、収量が増え「良かった」と好評だったといい、今年にはさらに実施規模を広げていく。横手市に本店を置く J A 秋田ふるさとも循環型農業として期待を示し、「活用を前向きに検討している」(園芸課) という。

ピルツは将来的に、市内の農家から廃菌床を無料ではなく買い取って、マットを生産する体制を構築したい考えだ。畠山社長は「農家が廃菌床処理に悩まない。そして『カブトムシといえば秋田県だね』と言ってもらえる新しい特産品にしたい」と語る。

また、自社で生産している菌床ブロックにも自信を見せる。消費者庁が今年3月、食品表示基準 Q & A を改正し、シタケに関して原産地表示を「原木または菌床培地に種菌を植え付けた場所」とする見直しを発表したためだ。従来は、中国産の菌床でも輸入後に国内で栽培すれば国内産と表示できていたが、これができなくなる。



ピルツの畠山琢磨社長

畠山社長によると、国内産として流通している菌床シタケの17%は中国などからの輸入菌床から育ったものだ。県産シタケが3市場で出荷量と販売額、販売単価で全国1位となったことを踏まえて、県産材にこだわる自社生産の菌床ブロックをさらに市内農家に利用してもらえれば、「(国内産として流通する輸入菌床シタケの) シェア17%を J A 秋田ふるさとが取ることができる」とみている。

ピルツは現在、収穫したシタケのほぼ全量を J A 秋田ふるさとに出荷しているが、自社ブランド「鱗花」の販売を拡大したい考えだ。鱗花は「地下50メートルからくみ上げる深層水を利用し、徹底した温度・湿度管理で引き締め、風味のあるシタケ」という。畠山社長は「自社商品と同じ品質で同価格の商品が店頭に並んでいる際、『環境に配慮した商品であるかどうか』という視点で消費者に手に取ってもらえる社会を目指したい」と話している。

(基本情報 = 2022年5月現在)

名称: P i l z 株式会社

設立: 2019年9月

代表取締役: 畠山琢磨

資本金: 100万円

所在地: 秋田県横手市十文字町十五
野新田字明神東58番地2

従業員数: 18人 (アルバイト含む)